

第4章 総括

第1節 六所家敷地内S E 2出土陶磁器の様相

はじめに

六所家は、富士市今泉八丁目に位置し、明治初年まで東泉院という中世から続く寺院を経営していた。平成19年度から開始された六所家総合調査の一環として、試掘・確認調査が行われた（渡井2007、佐藤2009）。

SE2は、平成20年度の調査により、敷地の北西部から確認された井戸跡である。同遺構からは近世後期の陶磁器を中心とした遺物群が出土している。本稿では、SE2から出土した遺物群について、一括資料として当該地における消費、流通などの問題に言及でき得るものであると考え、分析を加えるものである。

ここで行う分析は出土遺物全点を対象にし、これらを器種、生産地別に分類し、以降の分析の基礎データとする（第3表）。

1. 年代的位置づけ

SE2から出土した遺物は、総点数273点を数え、年代的には17世紀後半から近代にいたる資料が含まれており、その年代幅は広い。このうち混入と考えられる遺物を除くと、以下で触れるようにおおむね江戸時代、18世紀後半を中心とした製品で構成されている。

これまでの江戸遺跡の編年では、磁器碗・皿の存否とその組み合わせ年代的判断を行っており（堀内1997、堀内2001）、ここでも年代的判断基準となる各磁器製品（第75図）の内容から検討を行いたい。

SE2出土遺物群は、肥前磁器断面三角の高台皿、同粗製のいわゆるくらわんか碗、同薄手半球碗、同青磁染付製品、同筒形碗、同小丸碗、同望料碗、同立ち上がりが浅い皿などで構成されている。

断面三角高台（158、160）は、長吉谷窯、白川窯、柿右衛門B窯、楠木谷窯など1650年代～70年代に操業していた窯の製品に特徴的な高台作りで、初期伊万里の幅広U字状の高台から変化するものである。江戸遺跡では、1650年代～1670年代くらいまで（東大678号段階～東大H32-5段階）に多く確認される。

粗製のくらわんか碗（128、135、136、139）は、永尾窯、中尾窯、高尾窯など長崎県波佐見地方で多く生産されている製品で、江戸遺跡では1710年代（東大F33-3段階）ころから確認される。代表的な製品は、染付梅樹文（135）で、これは1770年代頃（東大Y34-4段階）まで見られ、こんにやく印判が施される製品（128、139）は、1810年代ころ（東大AJ35-1段階）まで確認できる。

薄手半球碗（130～133、137、138）は、体部が薄手で上質な製品である。江戸遺跡では17世紀末ころ（巢鴨1段階）から江戸時代を通じて確認されるが、量的に多いのは18世紀前半～中葉（東大F33-3段階～麴町SK317段階）である。

青磁染付製品（118、119）は、江戸遺跡では17世紀末頃から香炉、猪口などに認められるが、この段階では蛇ノ目凹形高台との相関性が高く、明代の龍泉窯青磁の影響が看取される。碗、皿などの一般的な器種に多く施されるようになるのは、18世紀中葉以降である。肥前では有田町広瀬向窯から多量に出土しており、広瀬窯はこの手の製品の主たる生産窯であると考えている。江戸遺跡では、1750年代～1780年代（麴町SK317段階～東大Y34-4段階）に多く確認される。

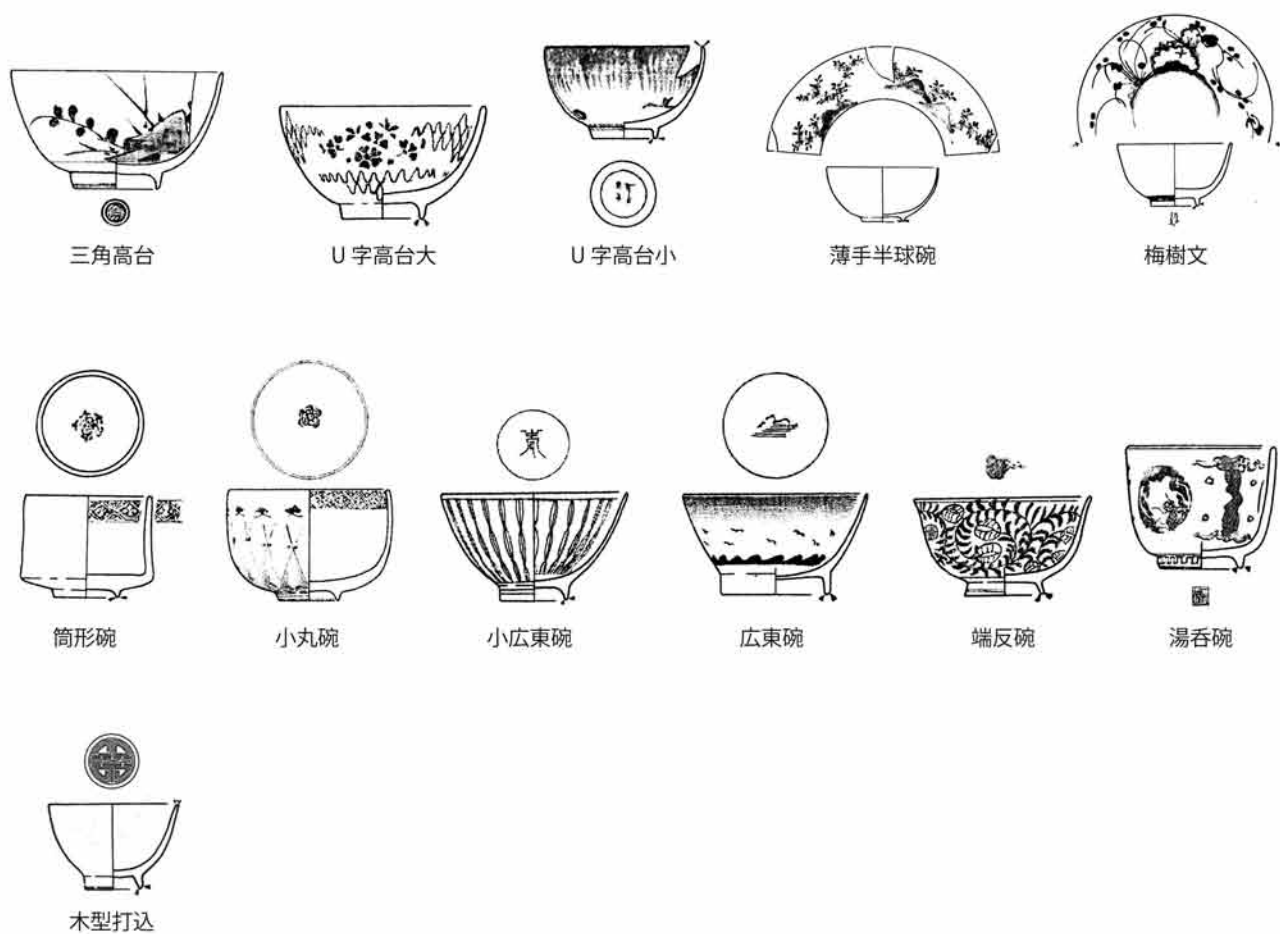
小丸碗（134）、筒形碗（148～150）は、有田町広瀬向窯、波佐見町皿山窯、永尾窯など多くの窯で生産されている製品で、消費遺跡でも一般に確認できる。江戸遺跡では、1750年代（麴町SK317段階）から確認できるが、多く確認されるのは1780年代～1810年代（東大E8-5段階～東大AJ35-1段階）である。

望料碗は、高台が開き腰が張る特徴的な蓋付き碗である。152は蓋であるが、その器形も身と同様摘みがやや広がり、肩が張っている。

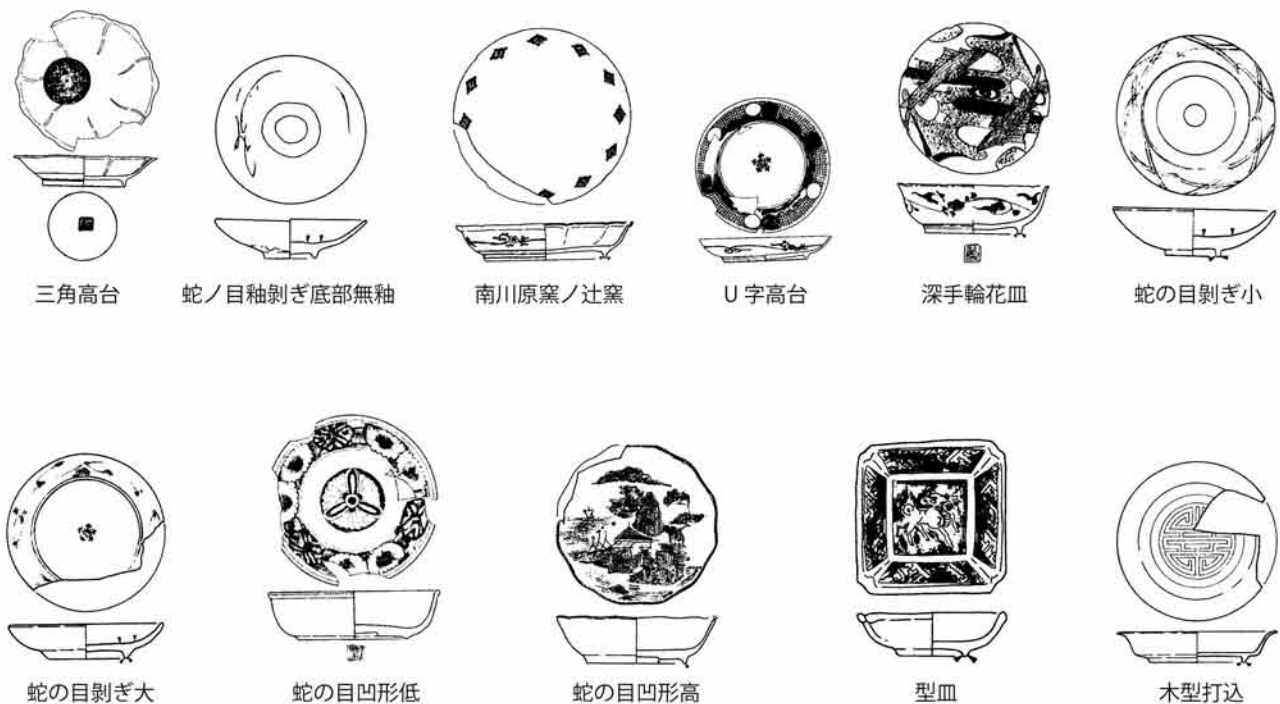
立ち上がりが浅い皿（156）は、江戸遺跡ではおおむね1780年代～1810年代（東大E8-5段階～東大AJ35-1段階）に多く確認される。

また、1780年代から確認される広東碗、19世紀か

○碗



○皿



第 75 図 年代判断のメルクマールになる小器種

第2表 各段階におけるメルクマールとなる器種・技法とその推定年代

	メルクマールとなる器種・技法	推定年代
丸の内 52	輸入磁器	1610～20 年代
有楽町 S22	初期伊万里碗・皿	1620～30 年代
東大 532	底部無釉碗	1640 年代
東大 678	三角高台碗・皿	1650～60 年代
東大 H32-5	柿右衛門様式	1670 年代
東大 F34-11	U字状高台（大）碗	1670 後半～80 年代
巢鴨 1	U字状高台（小）碗、薄手半球碗	1690～1700 年代
東大 F33-3	梅樹文碗	1710～30 年代
真砂 109	蛇ノ目凹形高台（低）皿	1730～40 年代
麴町 SK317	筒形碗、小丸碗、（青磁染付）	1750～60 年代
東大 Y34-4	小広東碗	1770 年代
東大 E8-5	広東碗	1780～90 年代
東大 AJ35-1	端反碗	1800～10 年代
東大 SK81	湯呑碗、蛇ノ目凹形高台（高）皿	1820～30 年代
巢鴨 16	幅広高台碗、型皿	1840～50 年代
弘方町 596	木型打込皿	1860 年代

ら確認される瀬戸・美濃の磁器製品が含まれていないことから SE2 の一括資料の下限は、1780 年代ころであると推定できる。

これとは別に出土資料の多くに二次的な被熱が確認でき、火災による廃棄の可能性が高いことが看取できる。調査を担当した佐藤祐樹氏は、寛政2年（1790）に描かれた東泉院絵図に「客殿焼失当時無御座候」、「唐破風当時仮建」との建部恭宣氏の指摘（建部 2009）から「寛政二年頃にあった東泉院主屋での火災とその片付けに伴う遺物である可能性」を指摘している（佐藤 2013）。

2. 器種組成

出土資料は、総点数で 273 点と組成分析を加えるには若干量的に少ないが、いくつか特徴的な器種が含まれており、遺跡の性格を反映していると考えられる。

まず、出土している器種は、碗、皿、鉢、蓋もの、水滴、灯明皿、坏、壺、甕、花生け、土瓶、播鉢、片口鉢、紅皿、鍋、徳利、水注、ほうろく、かわらけ、埴塙、七輪などである。これらは日常生活用品がひととおり揃っているように考えられるが、遺跡の性格と関連が強く想定できる香炉、御神酒徳利、仏飯器、仏花器などが皆無である。これらから SE2 に廃棄された遺物は、信仰の場とは異なる場所で保管・使用されていた道具類であった可能性が高い。

次に、いくつか確認されている特徴的な器種に触れたい。

163～165 は、焼塩壺の蓋である。いずれも身の成形が板作りの成形のものに伴う蓋で、小川望氏の研究では、イ類④に分類されるものである（小川 2008）。形態、

第3表 SE2 出土陶磁器組成

胎質	生産地	器種	慣用名	個体数
磁器	中国	碗		2
	肥前	碗	くらわんか	31
			青磁染付	13
			半球碗	35
			筒形	4
			その他	3
			不明	19
			碗小計	105
		皿	蛇ノ目凹高台	5
			その他	7
			皿小計	12
		蓋もの		3
		人形		1
		その他		5
			肥前計	126
陶器	瀬戸美濃	碗		2
			磁器合計	128
	肥前	碗	平碗(京焼風)	41
			呉器手	2
			その他	1
			肥前小計	44
	瀬戸美濃	碗		11
		皿		1
		鉢		1
		片口鉢		14
		灯明皿		8
		水滴		1
		坏		3
		播鉢		3
		その他		13
			瀬戸美濃小計	55
	志戸呂	灯明皿		2
		蓋もの		1
	常滑	甕		5
	備前	灯明皿		3
		播鉢		1
	京・信楽	碗		11
		皿		1
		鍋		4
		土瓶		5
		蓋もの		2
		その他		7
			京信小計	30
	堺	播鉢		3
	不明	土瓶		5
		鍋		2
			陶器合計	107
土器		焙烙		22
		かわらけ		7
		埴塙		1
		七輪		3
		塩壺		4
		不明		1
			土器合計	38
			近世遺物合計	273

胎土などからおそらく「泉州麻生」刻印がされる身とセットになる蓋であると判断される。「泉州麻生」刻印の塩壺は、1680年代～1730年代に多く確認されるものである。焼塩は、粗塩を壺ごと焼いた精製塩で、宴会などの調味料として使われていた。焼塩壺は、小川氏の研究では江戸遺跡で総出土数の3/4が出土、そのうち大名屋敷を含む武家地が8割を超えており、焼塩が江戸の武家地で高い需要があり、江戸の武家儀礼に伴って使用されたと考えられる。

120は、中国景德鎮窯青花碗である。二次的な被熱によって同手の製品同士が溶着している。器面には花唐草文が描かれており、1690年代にベトナムブンタオ沖で沈んだ中国のジャンク船ブンタオ・カーゴと1723～35年にベトナムカマウ沖で沈没した中国ジャンク船カマウに類例が確認できる（第76図）。また、江戸遺跡では共伴資料から17世紀末の廃棄と推定される渋谷区千駄ヶ谷三丁目遺跡0053号遺構から出土している。17世紀後半から18世紀前半は、磁器は国内では肥前製品が需要を充足しており、当該期に貿易陶磁器が出土した例は、長崎（海外貿易拠点）、大坂道修町（薬種仲間問屋）、大坂住友銅吹所（輸出用棹銅精錬）、江戸千駄ヶ谷三丁目遺跡（長崎奉行拝領地）など中国に繋がりがある場に限定される。

123は京焼と推定される平碗が少なくとも3個体分出土している。透明釉と鉄釉が掛け分けられており、透明釉部分には鉄絵で草花文が描かれている。器厚はやや厚めで、釉も厚く掛けられているが、成形や絵付けなども雑ではない。器形は、皿に形状に近い平碗で、絵付けの方法から18世紀の中葉以降の製品と推定される。こうしたタイプの製品は頻出的ではなく、器形のみならず成形、施釉なども一般的ではない。

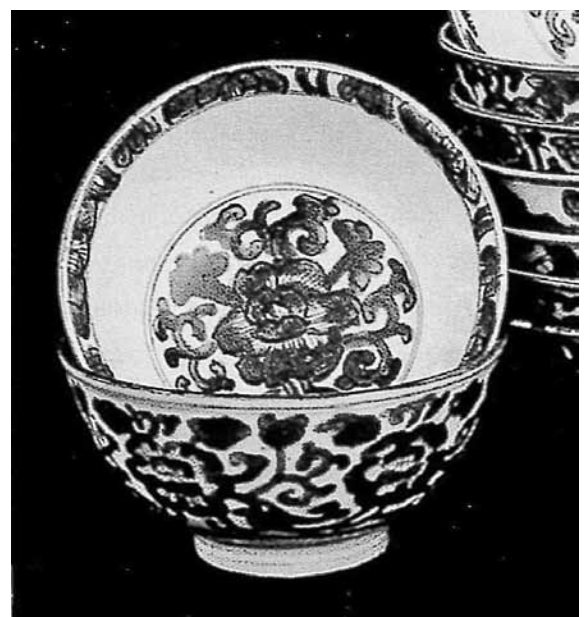
量的に多い器種は、肥前京焼風陶器平碗である。肥前京焼風陶器は、伊万里大川内の御経石窯、清源窯などで生産された、「清水」などの刻印を京焼に類似した成形、装飾に施した製品である。外側に文様を描く丸碗、内側に文様を描く平碗が生産の主体で、他に筒形碗、香炉、鉢などがあり、描かれる文様は山水文が多い。出土事例から全国に流通したヒット商品であったと換言できるが、出土の中心は17世紀末～18世紀前葉である。本例は文様や中央を深く繰り込んだ形態から18世紀中葉以降に下る製品と判断される。一方、京焼の平碗は、京

都御所などには18世紀に入っても量的に多く出土している（京都市埋蔵文化財研究所2004）が、他遺跡では18世紀に入ると半球形、半筒形の碗形が主体的になる。江戸遺跡でも18世紀中葉以降に下って平碗の京焼風陶器が出土する遺跡は、尾張藩邸など特に陶器に需要のある場であろうと考えている。SE2からの出土は123の京焼平碗が意識されていた可能性も考えられる。

3. 産地組成

生産地は、中国景德鎮、肥前・瀬戸・美濃、志戸呂、堺、備前、常滑、今戸、京都・信楽である。遺跡の位置からは志戸呂の製品が少ないように見られる。延宝8年（1680）の津波によって宿が移転した地理的に近い中吉原遺跡では、底部片数82点中6点、口縁部片数115点中8点と1割弱出土しており、出土している器種も碗、瓶、香炉、播鉢と江戸で出土しない器種が確認されているのに対し、SE2では灯明皿が1点と点数が少ない。静岡県では西部地域に分布の中心があり、掛川市原川遺跡、掛川市清水遺跡（日坂宿）、駿府城二の丸などは20%以上の割合を占めている。

また、江戸在地系のほうろく（177）やかかわらけ（161）などが出土している点も注目される。江戸在地系土器は、東海道を上って小田原城下町などにはある程度出土するが、静岡県東部では比較的出土量が多い三島市山中城三ノ丸遺跡第1地点（三島市教育委員会1995）、同接待茶屋遺跡（三島市教育委員会1996）、函南町仲道



第76図 プンタオ・カーゴ積載品

遺跡（函南町教育委員会 1993）などではほぼ認められない。それに対して、山梨県鰍沢河岸跡（山梨県教育委員会 2005 など）、甲府城下町遺跡（山梨県教育委員会 2004 など）では火鉢、遊具（芥子面）などの出土が一定量確認されている。甲府は柳沢家が大和に転封になった享保 9（1724）年以降に勤番支配になるが、江戸から派遣される勤番によって、「汲々として江戸風味に及ばざるを憂う」（『裏見寒話』）と記されるように都市江戸の影響を強く受けていたと考えている。こうした違いは生活様相の相違とは別に流通ルートの違いの可能性もあると想定されることから、断定はできないものの産地組成の状況はこれまで指摘したような特徴が看取されている。このあたりは年代的なことも含めて、陶磁器流通の復元は周辺遺跡の資料の増加を待ちたい。

小結

これまで六所家敷地内 SE2 出土資料の出土状況についてその概略と他遺跡との対比などに触れたが、さいごに六所家の歴史的環境と照射を試みたい。六所家が権門との関係が少なからずあったことが史料によって判っている。以下、概述する。

東泉院は酢が名物で、『和漢三才図会』はじめ種々の史料から「善徳寺酢」として名産であったことが知られている（大高 2011）。その由緒は中世にさかのぼり、将軍家への献上や大名など上級武家に販売を行っていたことが記録されている。

六所家は、江戸期を通じて伊勢津藩藤堂家、美濃高須藩松平家、対馬藩宗家、長門長府藩毛利家、美濃大垣藩戸田家をはじめとする大名家や山科少将、飛鳥井中納言など公家が庭を「御見物」しに頻繁に立ち寄り、東泉院が接應していたことが史料から知られている（菊池 2012）。その際に幾許かの謝礼が行なわれたことも記載されている。このうち寛延 2 年（1749）には肥前平戸藩主松浦誠信から詳細は書かれていないが 5 個の茶碗が心付けに贈られていることが確認でき、陶磁器が寸志謝礼として取引されていたこともあった。

また、文久 3 年（1863）には将軍徳川家茂上洛の際東泉院に宿泊したことが『昭徳院殿御上洛日次記』によって判っており、東泉院が将軍の宿所に選択された理由を「由緒と格式が認められた」と指摘している（大高 2009）。

今回分析の対象とした出土資料が、いくつかの点でそのような場の性格を反映している可能性が高いので、再確認したい。まず、日本ではほとんど出土事例がない時期に景德鎮の碗が出土していることである。おそらく通常の商業ルートでこれを入手することは、できなかったと考えられることから、将軍家への祈祷や御礼、あるいは大名や公家が立ち寄った際の饗応などの対価として贈与されたとことも考えられる。これは可能性の呈示にとどまるが、平戸藩主松浦家が贈った 5 個の碗は具体的な記載は無いものの、景德鎮の碗やあるいは先述した京焼であった可能性も否定的ない。また、焼塩壺の出土は、立ち寄った大名や公家接應に使用したと推定できるものであろう。

今回の分析では対象とした資料が量的に少なかったことで、明瞭なモデルの呈示にはいたらなかったが、東泉院の歴史的経緯と連動するいくつかの資料が確認できたと考えている。本資料は、前述のように 18 世紀後半を中心とした時期であり、その後の将軍接應などに関する情報は欠落している。今後、調査の進行あるいは民俗資料などとの対比によってこのあたりの復元をする必要がある（註 1）。

註

1. 民俗資料の中には、嘉永 6 年（1853）の共箱に入ったヨーロッパ製プリントウエア皿なども伝来している（下図）。



第 77 図 嘉永 6 年の共箱に入ったヨーロッパ製プリントウエア皿

参考・引用文献

有田町史編纂委員会 1988『有田町史 古窯編』

有田町教育委員会 2009『広瀬向窯跡』

大高康正 2009「將軍徳川家茂の上洛と東泉院」『六所家総合調査
だより』第5号

大高康正 2011「善徳寺酢に関する一考察」『六所家総合調査だより』
第9号

小川 望 2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社

函南町教育委員会 1993『仲道遺跡狐塚地点』

菊池邦彦 2012「富士山東泉院を訪れた人々」『六所家総合調査だ
より』第11号

京都市埋蔵文化財研究所 2004『平安京左京北辺四坊』

佐藤祐樹 2009「六所家埋蔵文化財発掘調査の中間報告」『六所家
総合調査だより』第4号

佐藤祐樹 2013「近世陶磁器からみた東泉院の活動」『六所家総合
調査だより』第12号

建部恭宣 2009「東泉院の棟札類と建築生産活動」『六所家総合調
査だより』第4号

富士市教育委員会 2002『中吉原宿遺跡』

富士市教育委員会 2013『六所家総合調査報告書 民俗』

堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東
京大学本郷構内遺跡調査研究年報』1

堀内秀樹 2001「関東地方（1）－江戸遺跡出土の肥前陶磁－」『第
11回九州近世陶磁学会 国内 出土の肥前陶磁 東日本の流通を
さぐる』

三島市教育委員会 1995『静岡県三島市山中城三ノ丸遺跡第1地点』

三島市教育委員会 1996『静岡県三島市接待茶屋遺跡』

山梨県教育委員会 2005『鰍沢河岸跡』Ⅱ

山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡』

渡井義彦 2007「六所家総合調査について」『六所家総合調査だより』
第1号

Christiaan J.A.Jorg Michael Flecker『PORCELIN from the VUNG
TAU WRECK』ORIENTAL ART Singapore